

1. 背景 ー断片化・画一化による観光地の環境の均質化ー

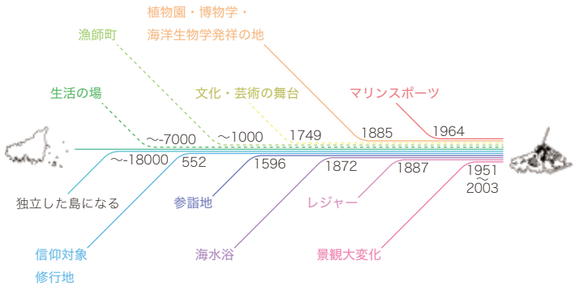
近年の観光地と呼ばれるような地域は、魅力的な風景や文化、産業を有しているにもかかわらず、それに応じた環境の作られ方が画一的になっている傾向がある。地域のアイデンティティとなる場所の周辺には既視感のある飲食店が立ち並び、「ご当地〇〇」、「〇〇名物△△」などといった言葉が観光客を迎える。そのような傾向は観光地同士の均質化を招き、場所の魅力が見失われる原因となる。本研究は、地域性を踏まえた観光地の環境づくりのアプローチを考察するものである。

2. 敷地 ー神奈川県藤沢市江の島ー



江の島は東西約 1200m、南北約 600m の島であり、対岸の鵠沼から橋を渡るか船に乗ることでアクセスできる。航空写真を見ると分かるように、島の西部は自然の台地が残っているが、島の３分の１にあたる東部は 1964 年の東京オリンピックのマリンスポーツの会場整備のために埋め立てられ、平坦な土地にほとんど建物が建っていない状態であり、主に駐車場が整備されている。

3. 歴史 ー多様性を育み続ける島ー



18000 年前に独立した島となって以降、図のように奇異な大地のもとに多くの側面を生み出した。しかし、戦後の大開発により景観は大きく変化し、生活・漁師町としての側面は失われかけている。その一方、開発のおかげでレジャー、マリンスポーツの聖地としての側面が強くなり、島内住民の生活の便も増したことから、開発自体も一概に否定されるべきものではない。

4. 環境の特徴

①様々な文化・産業が見え隠れしていること



島が産んだ多様な側面



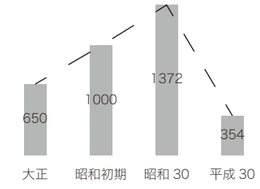
影は薄いが存在する様々な側面

前述したように、江の島には信仰対象、海水浴といった側面以外にも、多くの側面を併せ持つ。しかし、現状では信仰や海水浴、観光地化の側面が強く押し出されているあまり、他の側面が薄れてきてしまっている。

②減少する居住人口



廃墟化する民家



過去 50 年近くで大幅に人口は減少

江戸時代から昭和 30 年の東京オリンピックに至るまで、江の島の人口は緩やかながら増加していた。しかし、オリンピックが終わると同時に島の人口は減少し、現在では空き家も確認される状況になっている。

③自然のままの島 / 埋め立ての人工島



1950 年頃



2005 年頃

1964 年の東京オリンピックでセーリングの会場となった江の島は、会場整備のために東側の３分の２を埋め立ててヨットハーバーが開発され、島内に自動車乗り入れが可能になるよう、RC 造の橋が架けられた。これにより江の島は自然と人工の両側面を抱えたキメラ的性格を帯びる。

④首都圏近郊であること



都心から１時間半もあれば着く



車・バス・鉄道などでアクセス可

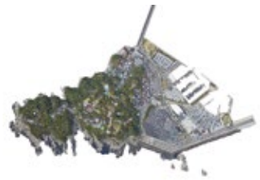
江の島は東京・鎌倉から近いため、歴史的にも多くの人々が訪れる場所であった。それは過去から現在、そして未来に至っても同様のことと思われる。都心からのアクセスの良さは江の島に関わる人が多くいるという点で重要に思われる。

5. 目的 ー歴史の積層による環境を肯定し、多様性からなる環境を考えるー

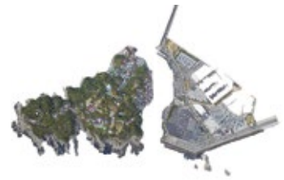
以上のように、江の島は奇異な自然地形に対し、大規模に人工的な開発を行って環境が形成されてきた。自然の島としての景観は損なわれることになったが、島内の生活の利便性が増し、マリンスポーツや植物学、レジャーの場所としての側面を付与した点もある。つまり、江の島においては、絶えず変化する景観とそれによって文化や生活、産業などが多様化していったという全体性・包容力に価値があるのではないか。
島の東部は 1964 年の埋め立て以降、空白の状態が続いている。だが、生活や漁業、ヨットハーバー、生活に根付いた信仰、岩場への抜け道、自動車交通など、多くの側面が凝縮された場所でもある。通常であれば否定されてしまうような大規模開発をあえて肯定し、島の多くの側面を取り込んだ多様性の中での江の島の環境づくりを提案する。

6. 設計の方向性　ー島の東西で異なる視点で環境の独自性を感じるー

①島東部の多様性・二面性から建築を作る



自然と人工
表と裏
急峻さと平さ
生活と観光



自然
表
急峻さ
観光

自然と人工
表と裏
平さ
生活と観光

島の西部は自然豊かで起伏があるため階段が多く、経験は途切れ途切れかつ一つの空間に複数の側面は同居せず、主に観光客のための表の環境である。対して東部は人工的かつ自然もあり、平坦で見渡しが良く、生活の場でもありながら観光客のためでもあるという、表と裏の側面を持った環境である。そこで、島の東部を自然と人工、生活と観光、表と裏といったハイブリッドかつ全体的な視点で感じられるようにする。

②環境の特徴を利用する



既存道のヒエラルキー



平さ





交通



特徴的な環境

プログラム

- 短期〜長期滞在の場
- 漁港
- 漁の作業場
- 食事をする場
- 公民館
- 銭湯
- ヨットハウス
- 公園
- 休憩所

外部の人の動線

島民向けの動線

深みに入る動線

設計の影響範囲











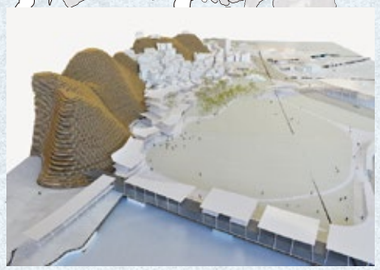












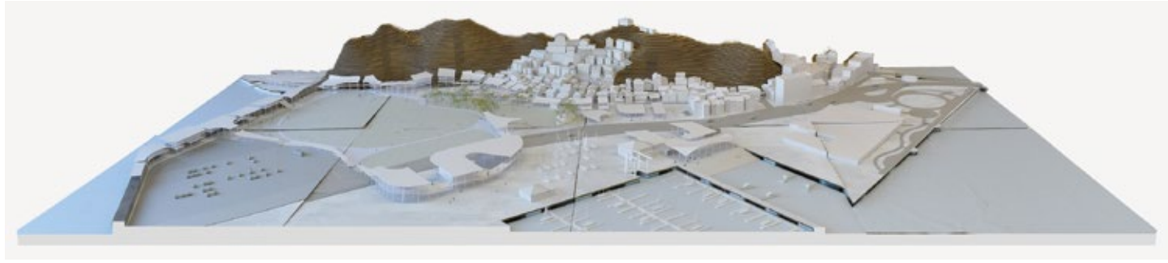


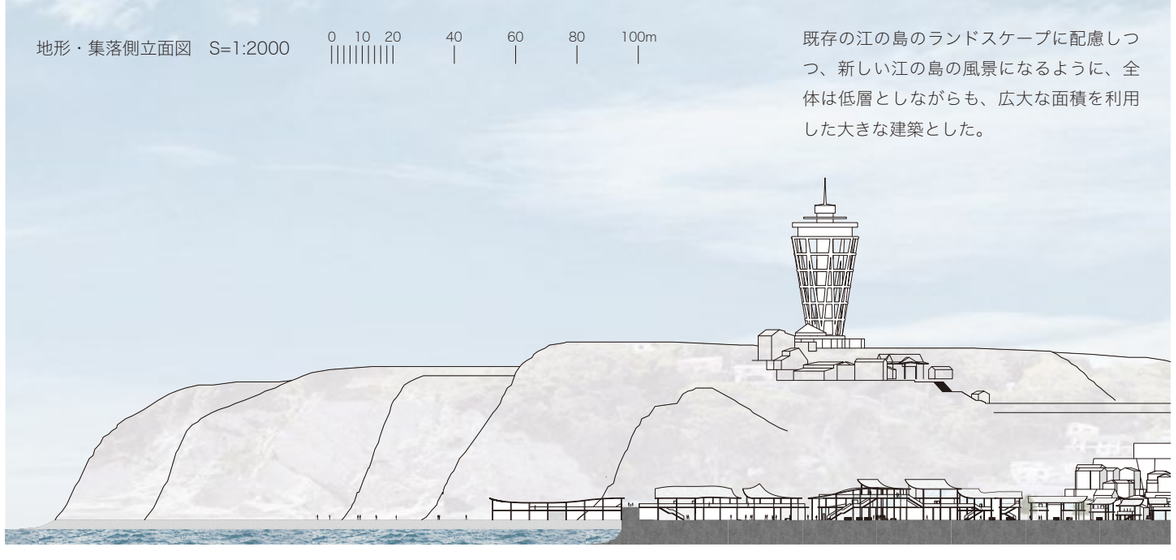


全体配置図・マスタープラン　S=1:3000

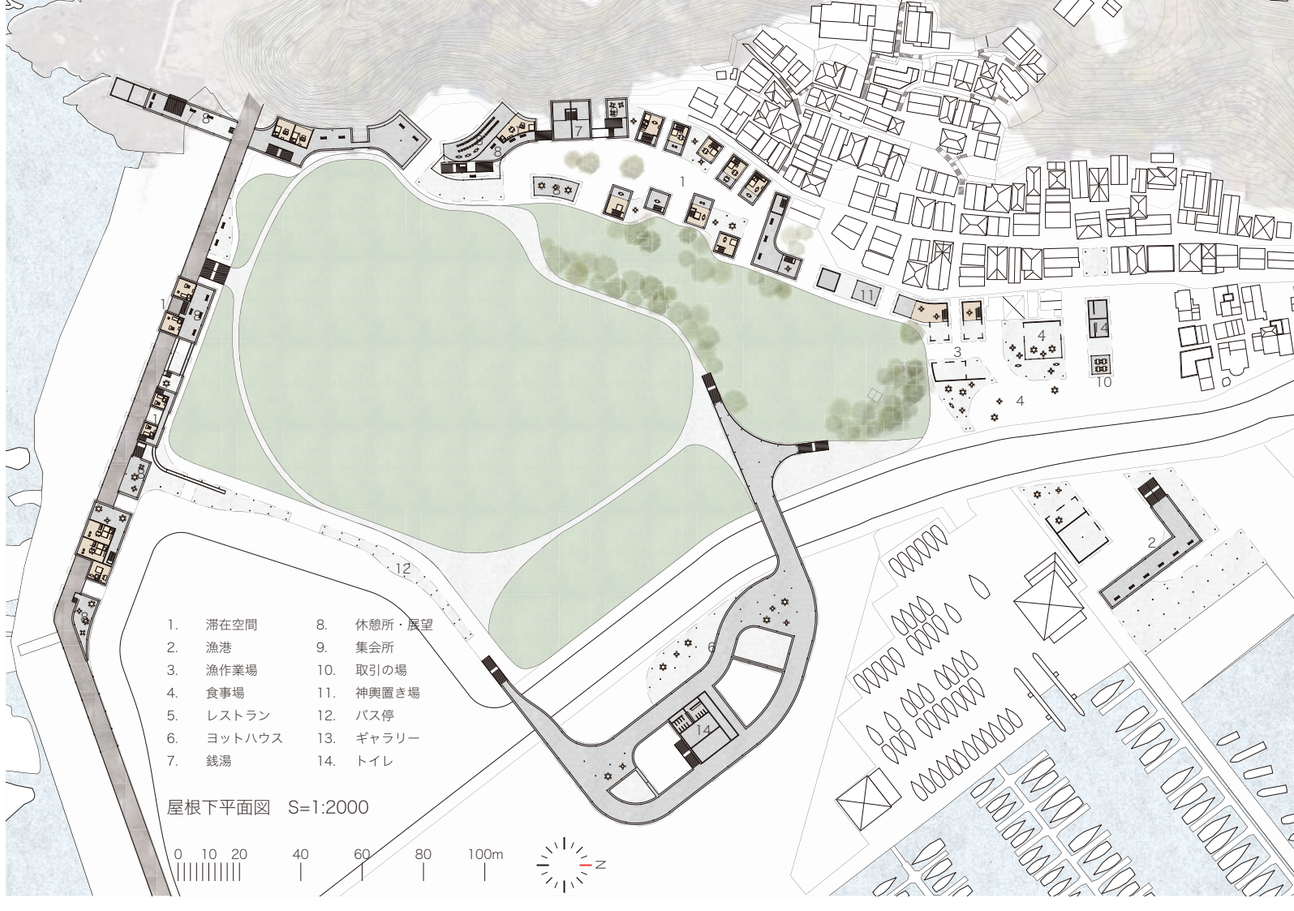
0 10 20 30 40 50　100　150m

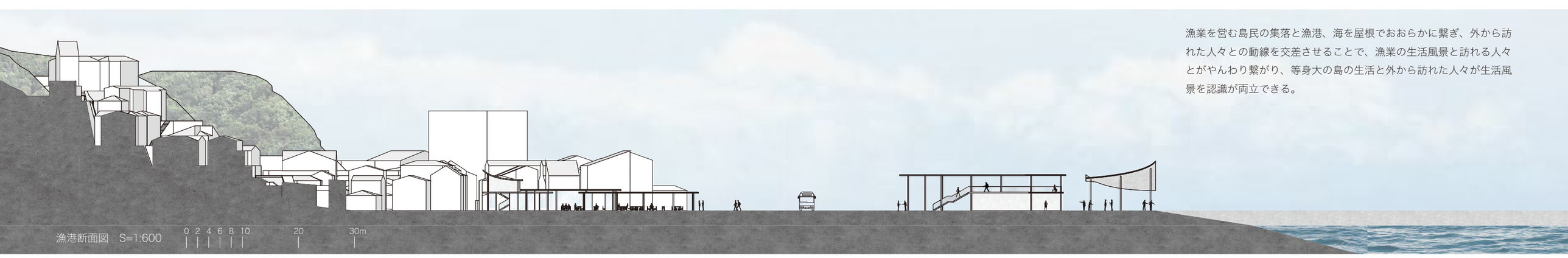
N



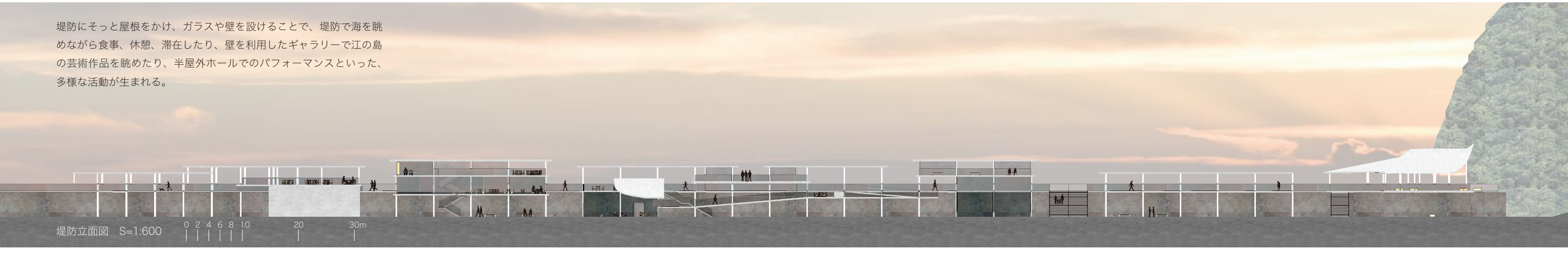


既存の江の島のランドスケープに配慮しつつ、新しい江の島の風景になるように、全体は低層としながらも、広大な面積を利用した大きな建築とした。





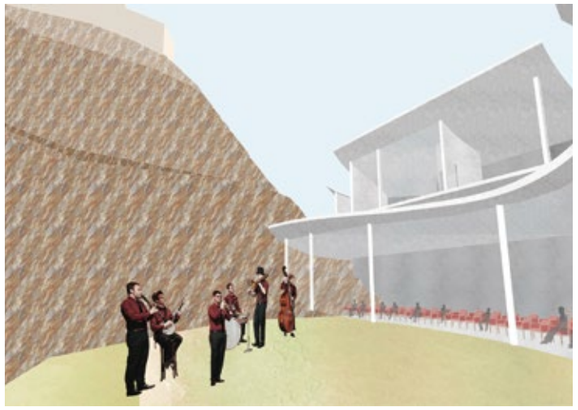
漁業を営む島民の集落と漁港、海を屋根でおおらかに繋ぎ、外から訪れた人々との動線を交差させることで、漁業の生活風景と訪れる人々とがやんわり繋がり、等身大の島の生活と外から訪れた人々が生活風景を認識が両立できる。



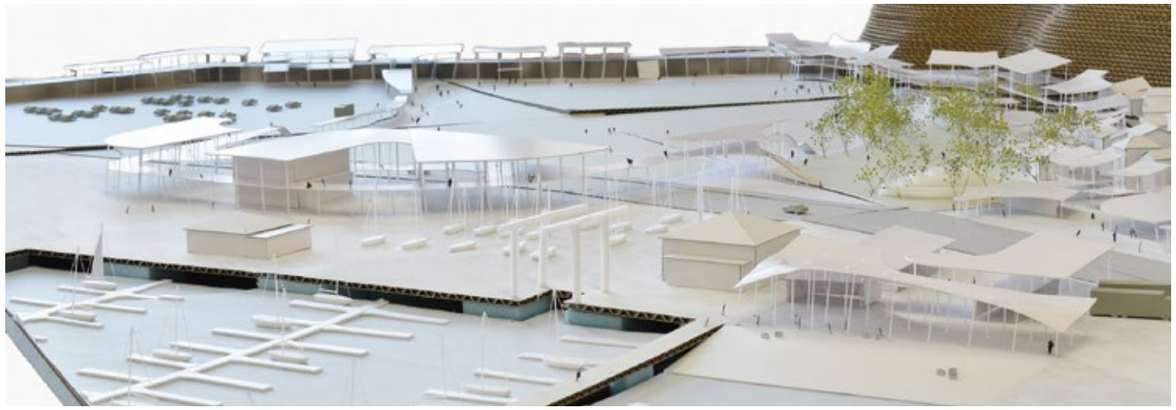
堤防にそっと屋根をかけ、ガラスや壁を設けることで、堤防で海を眺めながら食事、休憩、滞在したり、壁を利用したギャラリーで江の島の芸術作品を眺めたり、半屋外ホールでのパフォーマンスといった、多様な活動が生まれる。



堤防の上に屋根をかけて、滞在場所や休憩所、レストランなどから海や岩場を一望できるような人々の居場所にする。

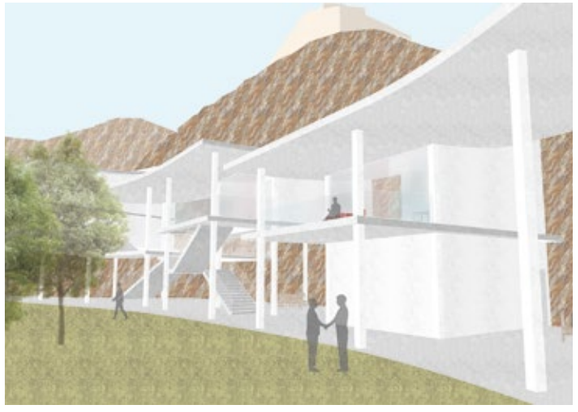


地形と建築によって囲われた屋外ホールによって、島の奇異な地形が認識される。





屋根が地形に呼応して形を変化させる。建築の手前側の広場からは、多様な要素を包含する建築群が連続的に眺められる。



既存集落と敷地の境界に計画した建築群では、軒下空間やテラスが島民と滞在者の互いの存在を感じさせ、交流を促す環境を作り出している。



２階デッキから漁作業と漁港が眺められることで、島の生身の生活と訪れた人の生身の認識が両立する。



マリンスポーツ関係者と外から訪れた関わりのない人が、断面的に緩やかにつながる。